

第1部 序論 研究の目的、現状と課題、本稿の構成

本稿のねらいは、ヴィクトリア期のイギリスを代表する知識人として、ウォルター・バジヨットを思想史上に位置づけることにある。

バジヨットが残した業績は多方面にわたっている。にもかかわらず、これまでは、政治、金融、経済学上の方法論などの理論領域で、それぞれ個別的に研究がおこなわれてきた。相互の関連性や彼の思想の全体像について注目するのは、ほとんどなかったといつてよい。

理由はおもに2点に集約される。まずはバジヨットがのこした評論の多くが雑誌掲載にもとづいており（ただし『ロンバード街』は書き下ろし）、彼自身が体系性や抽象性をめざすよりも、具体的現実によりそった時論の形式をとって発表したということである。先行研究も個別の問題関心からアプローチされがちだった。もう1点は研究者の専門領域と問題関心がかぎられているという、読み手側の専門性という事情である。自分の専門ではない分野については、読み手の多くは注意を払ってこなかったのである。著作群がもつ関連性や主張の一貫性について包括的に論じられることはほとんどなかった。そこには政治思想史と経済思想史との間の、すみわけに似た知的分断がある。政治領域では経済の観点が、経済領域では政治の観点が欠けていた。あえて一括すれば、バジヨットが注目した組織「経営」（つまり連続的な組織運営、命令権力の配分）の視点から読むという姿勢が、きわめて希薄だったのである。

のちに「社会の博物学者」とよばれたバジヨットは学問上の区別をあえて意識しなかった。この時期は、アルフレッド・マーシャルがのちに確固たる科学の一部門として経済学を確立するよりも前の時代である。バジヨット思想の特徴は「学問的禁欲」とは対局にある、素直でどん欲な幅ひろい知的態度にある。そのユニークな著作内容は、「紙上の解説」を「生きた現実」に近づけようとする、一種の経験的かつ合理的な方法態度とふかくかかわっている。本稿では、彼の主著3作がイギリスにのぞましい社会秩序を模索する立場から書かれ、「諸傾向の科学」を探究する作業であった点で相互に関連していることをあきらかにしたい。本稿は以上のような筆者の問題関心のもとで、バジヨットの思想構造に注目しながら、研究史上の分断を乗り越えることをめざしている。

本稿は3部構成をとる。第1部（序論）として、序章で先行研究の整理と本

稿の目的をあきらかにする。つづくバジヨット略伝では、政治・経済を中心とする評論活動を本格的に開始するまでに彼が習得したカルチュアに焦点をあてて論じる。おもな分析対象とするのは、亡くなるまでのおよそ10年間の著作群である（初期の文芸評論は対象としない）。前半生をあえて概観するには、彼の知的土台の形成過程を検討することが、のちの仕事にきわめて重要なかわりがあると考えからである（第1章）。

バジヨットの思想を検討するに先立って、カルチュアの意義と用語法について考察する。はじめにカルチュアの語源について検証し、マシュー・アーノルドとT.S.エリオットのカルチュア論との比較をこころみる（第2章第1-3節）。つぎに日本のカルチュア概念について、明治・大正期の日本のカルチュア概念の導入過程を概観する。こうした作業をふまえてバジヨットのカルチュア像に検討をくわえ、その独自性を見出す（第4-5節）。

第Ⅱ部 本論 バジヨットの政治思想、経済思想、文明社会論

第2部である本論ではバジヨットの主著について検討する。はじめに第3章では政治領域の主著とされる『イギリスの国家構造』（1867年 以下『国家構造』と略記）をとりあつかう。『国家構造』は、のちの作品に見られる特徴がいち早くあらわれた重要な著作である。『国家構造』は当時のイギリスの統治のしくみと、政治をめぐる支配と被支配の心理をたくみに融合させて論じており、政治指導者にむけて統治の方法を指南するという性格ももっていた。バジヨットが初期論文「議会改革」からひきつづいて関心をよせていたのが、第2次選挙法改正（1867年）による選挙権拡大である。選挙法改正後を見すえて、安定的統治を維持するための政策的処方箋として発表されたのが『国家構造』だった（第3章第1節）。

統治機構を観察するさいは、3権分立という法理論上の区別ではなく、「威厳的部分」と「機能的部分」、つまり象徴的な権威と実効的な権力の行使という2つの主体がつよく融合している点が強調される。統治機構が「仮装の共和制」の形態をたもちつづけている点を指摘したことが、『国家構造』最大の貢献だった。彼は統治機構を維持安定させるために現実の統治のあり方をとらえるという、経験的かつ合理的な判断力を重視した（第2節）。

バジヨットは「カルチュアをそなえた1万人」を政治の担い手として重視し、選挙権拡大には反対した。それは彼の観るところ、あらたに有権者となる都市の下層労働者が、政治に参加する資格を満たしていないからだった。財産も教養もなく、新聞も読めず、政治にかんする議論ができない者には、政治参加の必要要件が欠けており、世論を構成できない。そこで選挙権拡大に先立って、まずは初等教育制度の整備が急務であると主張した（第3節）。

統治機構の変化は、選挙権拡大だけにとどまらない。議会を構成するメンバーの変質や公務員組織の整備にともなう行政の拡大は、統治する側に業務の変更をもとめた。特徴的なのが、議会や行政のなかで、かならずしも政治的・経営的判断をとともなわない事務仕事が増えたことである。その結果、中央・地方行政は組織化が急速に拡大・進行した。バジヨットはこうした公権力の組織化に懐疑的だったが、その流れがおさえられないことも理解していた。行政業務の拡大にかんする指摘については従来ほとんど言及されなかったが、『ロンバード街』後半の銀行業界や実業界の組織化とかかわる重要な論点である（第4節）。

第4章では『ロンバード街』（1873年）をとりあつかう。『ロンバード街』は金融市場を分析した古典的著作である。本稿では、イギリス金融市場の現実的特徴に即しつつ理論化をおこなうという方法態度において『国家構造』と一致するという見方をとる。『ロンバード街』の市場の成長は、『国家構造』の政治体制の成長とつよく関連づけてとらえられているからである（第4章第1節）。

『ロンバード街』最大の理論的貢献は、イングランド銀行政策のなかの「バジヨットの原理」であり、同行の政策裁量を論理的に明確化したことである。このなかでは、「最後の貸し手」として同行が金融市場に積極的に働きかけ、銀行の取付危機にさいしては、あえて懲罰的なほど「高金利を課して多額に貸し付ける」よう提案されている。銀行の立場から見れば、たとえ高金利であっても資金を調達できるあてがあれば貸付がかなう。貸付を必要としない者が融資のため窓口に殺到することもふせげるし、恐慌の回避につながるというのである。バジヨットは不確実な信用制度に、安定性の根拠となる担保（準備金および安心感）をおくよう提言した。その貢献は金融市場の解明や政策提言の側面だけにとどまらない。敏感な信用制度には迅速な対応が必要という立場から、景気循環の理解がいちはやくおこなわれていることは重要である（第2節）。

本稿でもっとも強調したいのは『国家構造』と『ロンバード街』との構造的な類似性である。『国家構造』のなかでしめされた「威厳的部分」と「機能的部分」という見方は、『ロンバード街』にも導入されている。「威厳的部分」と「機能的部分」という独自の見立ては『国家構造』最大の業績にあたるが、金融市場を「王制」と「共和制」とになぞらえ、前者を「単一準備制」に、後者を「多数準備制」に対応させている。「取引における信用とは、政治における忠誠のようなもの」と指摘するように、バジヨットはイギリス金融市場が、イングランド銀行を頂点とする王制的形態を採用して成立する場所であると見なした。ここではイングランド銀行の管理体制が統治形態の一種として読み替えられ、信用はイングランド銀行の権威によっても担保されるとみなされている。信用をあらたにつくり出すことは困難だが、イギリスでは制度の新設よりも既存制度の利用に重点がおかれ、目的に応じて現行のしくみを適応させる形を採ってきたことが指摘される（第3節）。

『ロンバード街』後半の、イギリスの金融機関と組織の解説は、従来ほとんどふれられることはなかった。しかしこの論点は『国家構造』後半部の行政組織の変化にたいする論点、とくに事務仕事の急増と公務員組織の拡大とは密接なかかわりをもつといえる。『ロンバード街』では、イングランド銀行から株式銀行、個人銀行、ビルブローカーといった個別の金融業種の組織について、経験的知見から具体的に解説されている。当時のロンドン流ビジネスの特徴を要約すれば、それは財産とカルチュアとマナー、地位と名声などに裏打ちされた経営者個人への信頼などだった。明確な規則よりも慣習や裁量が力をもち、事業の開始や継続のさいにも個人的交際の要素が重視された。ところが政府とおなじく、銀行業でも業務の急増と複雑化と相まって、変化がもとめられていく。昔ながらの個人的交際の流儀をつづける個人銀行は衰退し、株式銀行は明確な規則にもとづく組織化がすすむことが予言される。このように『ロンバード街』後半部では、『国家構造』で展開された行政組織の近代化のながれが、金融業界の経営組織へと拡張されている（第4節）。

第5章では『国家構造』・『ロンバード街』とのかかわりから『自然科学と政治学』（1872年以下『自然科学』と略記）に注目する。前2作にくらべると、『自然科学』が評価されたのはおもに第二次大戦前までであり、現在では研究

もすくない。しかし本稿では前 2 作を理論的に拡張した社会認識の書であり、きわめて重要な意味をもつと位置づける。

『自然科学』のなかで重大なテーマとして取りあつかわれたのが「国民性」である。当時のイギリスでは、いわゆる「政治の科学」や科学としての経済学などを、いかに自然科学のように洗練させて専門性を高めるかというテーマが流行し重んじられていた。バジヨットもそのながれに敏感だった。『ロンバード街』では、イングランド銀行が政策的役割をはたすには、『国家構造』のなかで述べられている機能性以上の役割が、つまり「威厳的部分」による担保と保証が、同行にもとめられることが見いだされる。イングランド銀行の権限強化を提言するさいには、同行の伝統と「単一準備制」がもつ王制的形態にもとづく信用が、政治のなかでの忠誠のように利用できることが強調される。

『国家構造』の忠誠にせよ、『ロンバード街』の信用にせよ、バジヨットの関心は一貫して統治にあった。社会の支配と被支配のしくみや、社会制度の成立プロセスをおもに信頼などの社会心理的あるいは社会倫理的な要因にもとめた点が彼の方法上の特徴である。さきの著作で取りあげられたイギリスの統治機構と金融市場という素材が、『自然科学』ではイギリス社会の成立という思考の枠組みへと拡張され、一般的な問題関心として読み替えられた点は重要である。統治と信用という社会に重大な 2 つの柱を分析したのち、さらに独自の文明社会論の構築を目ざしたのが『自然科学』だった（第 5 章第 1-2 節）。

「政治社会にたいする自然選択と遺伝の法則の適用にかんする諸考察」という副題をもつ『自然科学』では、政治社会の起源や人類の未開状態からの進歩過程を考察するために、当時最新の人類学や生理学等の成果が取り入れられている。その目的はイギリス人の「国民性」を解明することにあつた。イギリス社会を統治する資質だけが大切なのではない。統治される側にも、ただ選挙権を獲得・行使するだけでなく、政治判断をおこなう「世論」を構成できるだけの資格要件がもとめられる。バジヨットが理想とする「国民性」とは、政治社会の担い手となる世論を構成するための「議論」の資質であつた。

『自然科学』では、社会の文明化プロセスが、初期の準備時代から 3 つに時代区分されている。(1)「模倣」(2)「戦争」、(3)「議論」であり、各時代はさまざまな「偶然の優位」に左右される。『ロンバード街』でいえば、「偶然の優

位」から設立されたイングランド銀行は、最初は私的な預金銀行業から出発したが、やがて別の機能がもとめられ、その機能を後から獲得することで、政府の銀行という新しい個体へと成長したと解釈された。それは自然選択と遺伝の原理を、自然界を克服してきた文明社会へと当てはめる最初のころみだった。

バジヨットは、すすんだ社会に見られる特質を「議論」の要素にもとめた。議論は、社会の遺伝プロセスである模倣（個体の獲得形質が集団へと拡張される過程）によって堆積した慣習と社会変化とを調整するとともに、衝動的な行動（その究極が戦争）を抑制する働きをもつとされる。しかしたとえ議論の時代に至り、統治が洗練されたとしても、模倣や戦争といった人間の衝動的要素はしばしば「先祖がえり」としてあらわれ、決して消え去りはしない。『自然科学』ではこうした累積的イメージが地質学から読み替えられ論じられる（第3節）。

『自然科学』は、当時の「科学」的な成果がいち早く取り入れられている。『自然科学』の方法態度や思考法にもっとも強い影響を与えたのが、H.T.バックルの『イングランド文明史』（1857-61）だった。本稿では、バックルがとなえた「傾向の法則」という方法概念に、バジヨットが強い関心をもっていたことを指摘する。『自然科学』のなかではバックルにふれつつ、時代のなかで人間の意志にはたらきかける「諸傾向の科学」の探究が宣言される。『イングランド文明史』がもたらした「諸傾向の法則」という発想は、J.S.ミルが提唱する「統治形態の傾向に対する問題」（統治の問題は普遍的ではなく、特定の国民性や時代に関わるという問題）とともに、バジヨットが模索する「諸傾向の科学」への道筋をつくったと解釈できよう。

バジヨットにとって自然科学とは自然科学一般や物理学をさすのではなく、バックルを祖とする、自然についての科学的・合理的思考を意味した。『自然科学と政治学』という表題には、特定の時代と社会、つまり当時のイギリス社会にあてはまる「諸傾向の科学」と政治学のありかたを探究するという、バジヨットの強い意志がこめられていた（第4節）。

「議論による統治」のなかで美德とされるのが「いきいきとした穏健」という特質である。これは議論による行動と思想のいきすぎを抑制し、精神の行動力と均衡をかねそなえる資質である。バジヨットが最上とする議論のありかたとは、意見の衝突を内包しながらも、「いきいきとした穏健」によって調停され、結論

へとみちびかれるプロセスである。だが社会では、構成メンバー全員がすぐれた「議論」の能力をみだしているわけではない。そこですぐれたカルチュアと判断力とに裏打ちされた「いきいきとした穏健」がもとめられる。

バジヨットはイギリスの政治社会（金融市場をふくむ）を抽象的システムではなく、「偶然の優位」から出発した歴史的現実の累積過程として理解した。『自然科学』は、特定の時代と社会にあてはまる「諸傾向の科学」の構築を追求する作業であったが、そうした意図にもとづく具体的・歴史的なケーススタディとして発表されたのが『国家構造』であり、『ロンバード街』だったといえよう。彼が思い描いた「諸傾向の科学」とは、具体的な歴史的現実をその構造的要因までさかのぼって観察分析する「科学」だったと推測される。「諸傾向の科学」は、『国家構造』・『ロンバード街』から『自然科学』にいたるまでバジヨットにとって生涯の重要な研究テーマとなっていた（第5節）。

第Ⅲ部 結論と今後の課題

第6章では、この論文を総括するとともに、バジヨットが最晩年におこなった一連の『経済学研究』について部分的に論じる。バジヨットは生涯をつうじて政治や金融の場における「信用」や、「支配」または「統治」のしくみを解明することをめざしていた。統治機構であれ金融市場であれ、いまある組織や制度をいかに運営するべきかという経験的かつ合理的な観点から出発するのが、彼が提唱する「実業の科学」である。彼にとっては議会政治も公務員組織も銀行業務もすべてが実業であり、世の中にある政治的な仕事（political business）にふくまれた。『国家構造』の用語法にそくせば、政治社会の本体である「機能的部分」とは、組織の管理運営（administration）やマネジメント、調整といった仕事を意味すると見なすことができる。「実業の科学」とは仕事をつうじた日常経験のなかでの合理主義、すなわち経験的合理主義の追求を意味しており、中産階級たちの自尊心に根ざしたものだ。こうした中産階級によるガバナンス論は『国家構造』・『ロンバード街』の官僚制批判の根拠となっており、のちのマーシャルの「経済騎士道」の考え方とも共通する。

バジヨットが制度分析をおこなうさいには、つねに「機能的部分」の観点から対象を理解する姿勢が徹底していた。こうした見方は、経験の中から理にか

なったものを引き出すというイギリス流の経験科学的な発想にもとづいていた。バジヨットにとって経験科学的に認識されないものは意味がなく、自分がイメージする「諸傾向の科学」には当てはまらなかった。彼が理想とする社会とは、「いきいきとした穏健」という資質をもった者たちが「議論による統治」をおこなう社会だったと要約できる。ただし、その担い手は「議論」の能力をもった「世論」を構成できる「カルチュアをそなえた1万人」にかぎられた。それは反面で、急激な民主化を拒絶する彼の方法態度にもつながった（第6章第1節）。

未完作『経済学研究』は『自然科学』の延長線上に意識されたと推定できる。『経済学研究』では特殊と一般という方法論上の問題が検討され、古典派経済学の再構築が模索されている。この認識は、イギリスの経済学が「特定の社会の富」ではなく、「あらゆる社会の富」に影響を及ぼす主要因についての学問として組み立てられていることが間違い、という指摘にもあらわれている。

『経済学研究』のなかの論文「イギリス経済学の基本原理」のなかでは「諸傾向の科学」とともに「歴史と経済学との調和」が提唱されている。これは彼にとって、『自然科学』で得た成果と経済学との調和をめざす作業でもあった。この方法論上の整理作業は、経済理論の領域ではイギリス歴史派経済学の立場とも共通する関心をもち、やがてマーシャルやジョン・ネビル・ケインズにひきつがれ、洗練されていく。

おわりに、本稿で残された研究課題について要約する。バジヨットの評論のうち、初期の文芸評論についてはほとんどふれられなかった。文芸評論は30代半ばまでにかぎられ、その後は書かれなくなった。登場人物の成長や作者の人格につよい関心がむけられている点のみ、支配や信用といった彼の社会心理的あるいは社会倫理的な手法にひきつがれる特徴として指摘したい。

本稿が対象としたのはバジヨットの若き日の成長過程と晩年10年にかぎられる。それは、バジヨット思想の構造的連関をあきらかにしたかったからだが、同時代の思想家との交流や、経済学（J.S.ミルやジェヴォンズ、イギリス歴史派経済学等）や歴史社会学との関連について十分に分析できなかった。同時代人との相互関係や経済学クラブ等に見られる思想サークルの関連についても、これからの研究課題としたい（第2節）。